慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	恩師回想
Sub Title	
Author	小林, 邦夫(Kobayashi, Kunio)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.47 (2011.) ,p.250- 251
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小林邦夫教授 退職記念号 = Sonderheft für Prof. Kunio KOBAYASHI
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20110331-0250

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

恩　師　回　想

獨協大学での学部時代にドイツ語・ドイツ文学の基礎を学んだが，良き師と出遭うことができたのは幸運であった。一年次はクラス担任の小池辰夫先生のドイツ語文法が週 3 時間，管藤高徳先生の講読が 2 時間，ヨープスト先生の会話が 1 時間と，週 6 時間のドイツ語漬けだった。二年次から山村英子先生の作文（テキストが岩崎先生の『中級独作文』）と講読（ルター，シュティフター，ベルゲングリューンなど）で鍛えられた。ゼミはカロッサの管藤ゼミで，『指導と信従』，『ルーマニア日記』などだった。管藤先生の「文学特論」ではトーマスマン，ヘッセ，リルケ，ホーフマンスタール，ヘルダーリンなどの文学世界に触れた。ゼミ生を平林寺に案内して下さったこともあった。辻村公三先生の「ギリシャ語」の講義にも出遭えた。土井虎賀寿先生の「哲学」の授業中に紹介された，Einführung in das Kegon Sutra（『華厳経入門』）が青山の OAG に置いてある，というのでそれを求めた。日本語に訳して，それを先生の研究室に持って行ったら，先生は大そう喜ばれた。先生は『華厳経』をドイツ語に訳され，それは今東大寺の五重の塔の下に眠っているとおっしゃっていた。非常勤でお見えになっていた星野慎一先生の「抒情詩人ゲーテ」の講義では，時おり長いゲーテの詩を朗読され，その発音の素晴らしに魅了された。

大学院から慶應で勉強させて頂くようになり，学部とは異なるアカデミックな雰囲気の中で酔いしれて，修士二年間は幸せな毎日だった。岩崎英二郎先生の「ドイツ語史」，様々な新旧「ドイツ語理論」に触れて，レベルの高さに感激した。塚越敏先生の「リルケ」は先生の研究室で一対一の個人授業だった。宮下啓三先生の「スイス文学」は同期の仲間との楽しい授業で，合同研究室で行われた。皆で丹沢にハイキングをしたのが良い想い出となっている。嶋田勝さんや高橋義人さんもいらした。七字慶紀先生の「ヘルダー」は樹に囲まれた木造・旧校舎での授業で，難解な論文を読まされた。最初にレポートをした私はなかなか解放されず，何週間も続い

た。お陰で論文世界の厳密さを知った。非常勤で来られていた橋本郁雄先生の「中世ドイツ語」では，Ackermamm aus Böhmen (FNHD) を精読した。ジェット機教授と謳われた高橋義孝先生の授業は文芸理論がテキストで，何かと洒落ていた。江戸っ子気質のべらんめえ調が小気味よかった。菊盛英夫先生の「トーマスマン」では，授業後のカフェーも楽しかった。アットホームな雰囲気の授業だった。三田では旧図書館で読書をする日々も多く，聴講二年を含めると，都合七年間学ばせて頂いた。

アーヘン留学中は，シュッテター先生の「ドイツ語学」,「言語哲学」の講義によく出た。まだお若くエネルギーに溢れていた。バイヤーデルファー先生は「演劇論」で，講義の他に修学旅行があり楽しかった。ハンブルグに 4・5 日ほど滞在し，一日に必ずお芝居をひとつ観るというもので，観劇の魅力を味わった。「ゲーテの抒情詩」の講義もあり，その後の私の研究に役立った。

こんなに多くの素晴らしい先生方と出遭うことができた。ここに，謹んで諸先生方に感謝申し上げる次第である。五十三人の善知識を求めて遍歴した『華厳経』の善財童子のように，私の旅はまだ続くであろう。